



安部公房『砂の女』論(二〇〇九年度卒業論文要旨集)

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 北海道教育大学国語国文学会・札幌 公開日: 2012-01-24 キーワード: 作成者: 神澤, 俊 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.32150/00007345

安部公房『砂の女』論

近代文学研究室 六四二七 神澤 俊

本研究は、安部公房の『砂の女』の箱書きにある「鳥のように、飛び立ちたいと願う自由もあれば、巣籠って、誰からも邪魔されまいと願う自由もある。(中略)色も、匂いもない、砂との闘いを通じて、その二つの自由の関係を追求してみたのが、この作品である」という記述に注目し、安部公房の考える二つの自由とその関係について考察したものである。

従来の研究では、外界から「義務のわずらわしさと無為から、ほんのいつとき逃れるために」砂の村を訪れた男が「飛び立ちたいと願う自由」を、砂の穴に住む女が「誰からも邪魔されまいと願う自由」を、それぞれ象徴していると考えられてきた。しかし、そう考えた場合、男の自由は、義務からの解放と穴からの脱出という、外界と砂の穴の中ではそれぞれ異なるものを指していることになる。作品分析を進め、「飛び立ちたいと願う自由」とは精神に拠るものであり、「誰からも邪魔されまいと願う自由」とは肉体に拠るものであることを明らかにした。

また、安部公房のエッセイ『砂漠の思想』を参考に、男と女の関係から、これら二つの自由の関係についても考察した。その結果、最終場面で男が自らの意志で穴に戻り、女が意志とは関係なく穴を離れていったことから、二つの自由は両立し得ない関係であることを明らかにした。